

おねショタ。お姉さんが導く初めての快感。精通体験

「ミツキが学校休むなんて初めてだよね」

「そうだよねえ、ちょっと心配」

「だからやっぱり家に行ってあげよう」

「でも、迷惑じゃないかな」

「大丈夫だよ。弟君もいると思うし」

高校の教室、終礼が終わった直後、キョウコとヒカリは話していた。

2人は高校2年で、今日は同じクラスのミツキが学校を休んでいた。

ミツキが学校を休むのは初めてだったので、心配で家にお見舞いに行くことになった。

でも、キョウコの本当の目的は、ミツキのことを心配して見に行くことではなかった。

「ねえ、キョウコ。弟君って、まだ小学生だったよね。もう帰ってるのかな？」

「うん、学校はすぐ近くだし、終わるのも早いだろうからもう帰ってると思うよ」

「そっか。それなら、まあ大丈夫かな」

キョウコとヒカリは、高校を出て、ミツキの家を目指している途中で話をしていた。

キョウコとヒカリは、以前に何度かミツキの家に遊びに行ったことがあった。

キョウコは1人でも、ミツキの家に行ったことがある。

「でも、弟君は大丈夫なのかな。お母さんって今日は、夜勤なのかな」

ヒカリがそう言っている。

キョウコは今日はミツキの母の仕事が夜勤であってほしいなと、心の中で思っていた。

ミツキの家は母子家庭だった。

かなり前に離婚して、ミツキの母は、ミツキと弟を女手一つで育てていた。

ミツキの母は、看護師をしていた。

夜勤があるので、夜勤のときは、ミツキが年の離れた弟の分も含めて夕食を作ったり、家事をしていた。

もし、今日、母親が夜勤の日であれば大変だった。

ミツキが動けなければ、弟の夕食を誰が作るのかということになる。

キョウコはそれが狙いだった。

「弟君の名前って、なんて言ったっけ？」

ヒカリがキョウコに尋ねてきた。

「ハルト君だよ」

キョウコはそう答えた。

「あ、そうそう、ハルト君だ。けっこうかわいいよね、ハルト君」

「まあね。お母さんも美人だし、ミツキも美人だからね」

ミツキの弟のハルトは、今、小学6年生だ。

短くした坊っちゃん刈りで、つぶらなきれいな瞳。

純粹そうな少年だけれど、微かに大人への階

段を登りつつあるような、はかなげな雰囲気。
キョウコはハルトのことをかわいく、いじらしく
思っていた。

キョウコは一人っ子だ。

兄弟姉妹がもし欲しいなら、絶対に、弟が欲し
かったと思っている。

ハルトはまさにキョウコの理想像のような弟だ
った。

ミツキのことを心配してお見舞いに行くという
口実で、ハルトにいろいろしてあげたいという
のが、キョウコの目的だった。

そのためには、2つ条件があった。

1つ目は、ミツキがベッドから動けないくらい
にダウンしていないといけなかった。

もちろん、友達として、ミツキのことは心配して
いるけど、ミツキが動けるのであれば、弟のハ
ルトの最低限の世話をしてしまうだろう。

そうなると、他人であるキョウコの出る幕では
なかった。

もう1つの条件は、ミツキとハルトの母親のこ
とだった。

今日が夜勤なのか否かで、状況は変わってく
る。

夜勤であるならば、もう出勤していて家にはい
ないだろう。

休みなのであれば家にいるだろうし、日勤な
のであれば、もうすぐ帰ってくることだろう。

今日が夜勤ならば、キョウコがハルトにいろい
ろとできるチャンスは訪れる。

キョウコとヒカリは、ミツキの家のマンションに着いた。

ちょうど他の人が入っていくところでオートロックが開いたけれど、エントランスでちゃんとインターフォンを鳴らすことにした。

部屋番号を押し、応答があった。

「はい」

ハルトの声だった。

キョウコとヒカリは、要件を伝えて、開けてもらった。

9 階の部屋までエレベーターで上がり、部屋の前のインターフォンを押した。

ドアを開けて、中から、ハルトが出てきた。

「ああっ、ハルト君、久しぶり。お姉さん大丈夫。私たちお見舞いに来たんだけど」

キョウコはそう言った。

「ずっと寝てます。どうぞ」

ハルトがそう言い、中に入れてくれた。

「おじゃましまーす」

キョウコとヒカリはそう言いながら、部屋の中に入った。

「あの、お姉ちゃんの部屋ここですけど、まだずっと寝てます。僕、1 時間くらい前に帰ってきて、少しだけお姉ちゃんと話しました。午前中に、病院に行ってきたみたいで、かなり熱があるみたいです。でも、ただの風邪なんだそうです。1 時間前にちょっと話した後は、また寝てるみたいなんで、起こさないようにしてください」

ハルトはそう声を落としながら、キョウコとヒカリに説明した。

しっかりしている子だなと、キョウコはハルトのことが一段と愛おしく感じた。

ゆっくりと、ミツキの部屋の扉を静かに開けた。確かに、ミツキはぐっすりとベッドで仰向けに眠っているようだった。

苦しそうというわけではなく、普通に寝ているようだった。

3人はリビングの方へいった。

「ハルト君。今日ってお母さんはいないの？」

キョウコがそう尋ねる。

「うん。いないよ。今日は夜勤だから」

「やっぱそうだったんだね」

ヒカリが言った。

キョウコは内心、やったと思った。

状況的には理想的だと思った。

「晩ご飯とかはどうするつもりなの？」

ヒカリがハルトに尋ねた。

「特に決めてませんけど」

ハルトが答えた。

「よし、じゃあ、お姉ちゃんたちが作ったげるよ」

キョウコがそう言い、冷蔵庫を開けて、作り始めた。

ヒカリは料理ができないので、その他の家事を担当してもらうことになった。

といっても、洗濯と風呂場の掃除だけだった。

キョウコは冷蔵庫の有り合わせの材料で夕食を作った。

少し早めの時間だったけど、それを3人で食べ始めた。

「ミツキの分は作ったの？」

ヒカリがキョウコに尋ねる。

「ううん。後で、雑煮か何か作ろうかなと思って」

「そうか、そうだね」とヒカリが言った。

ハルトはおいしそうにキョウコが作った料理を食べていた。

やっぱかわいい、こんな弟がいたらなあとキョウコはつくづく思っていた。

「どうする？ 私たち、そろそろ帰ろっか？」

2時間ほどリビングでのんびりとしていたけど、ミツキは起きてこなかった。

また部屋に様子を見に行ったけど、来た時と同じようにすやすやと眠り続けていた。

「そうだね。ここにいててもしょうがないしね」
キョウコはそう言った。

「じゃあ、ハルト君。お姉さんたち帰るけど、他に今やっという方がいいこととかある？」

キョウコはそうハルトに尋ねた。

「大丈夫です」

ハルトはそう答えた。

キョウコとヒカリは、マンションを出て、それぞれの家に帰るために途中で別れた。

でも、キョウコは家には帰らなかった。

キョウコの母親に向かって、ラインでメッセージを送っていた。

『今日は友達の家泊まるので帰らないから』

キョウコはそうメッセージを送った。

その後、近所をぶらぶらと散歩した後、再びミ

ツキの家のマンションのエントランスに着いた。
数時間前と同じように、部屋番号を押し、インターフォンを鳴らした。

ハルトがまた応答した。

「あっ。私、さっきのお姉ちゃんだけど、ちょっと開けてくれる」

ハルトはすぐにマンションの入口の扉を開けてくれた。

キョウコは9階にエレベーターで上がり、部屋へ向かった。

家の前のインターフォンを鳴らすと、扉がすぐに開いた。

「なにか忘れ物？」

扉を開けた、ハルトはそう、キョウコに尋ねた。

「ううん。あのね、ハルト君。私やっぱり心配だから、今日はここに泊まることにしたの。それでもいい？」

ハルトは一瞬固まってしまったけど、唇を緩めて、キョウコを中へ入れてくれた。

「ミツキまだ寝てる？」

キョウコがハルトに尋ねる。

「うん」とハルトが答えた。

「寝てるのならそれが一番いいもんね」

キョウコはそう言った。

少し残っていた家事をキョウコは済ませていった。

「ハルト君、いつもお風呂って何時くらいに入るの？」

キョウコはドキドキしながらハルトに質問した。

「だいたい今ぐらいの時間です」

ハルトが答えた。

「じゃあそろそろお風呂入れるね。今日はお姉さんもここに泊まらせてもらうからお風呂に入るね。一緒に入る？」

「大丈夫です、一人で入ります」

ハルトが軽く苦笑しながら言った。

キョウコはちょっと、いや、かなり残念だった。

ハルトが先に風呂に入ることになった。

洗面所へハルトがいき、洗面所の中に入り、横滑りの扉を閉めた。

キョウコは、興奮していた。

今すぐにでも、自分もお風呂場へ行きたかった。

すぐにそうしようかと、何度か思ったけど、すんでのところでそれをせずにした。

理性がまだわずかに勝っていた。

一度、ミツキの様子を見に行こうと思い立ち、ミツキの部屋へ向かった。

扉をそっと開けて、キョウコは部屋の中に入った。

ミツキは相変わらず眠っていた。

ずっと眠っているので、大丈夫かなとキョウコは思ったけど、呼吸もしっかり落ち着いていて、汗もかいていない様子だったので安心した。

リビングに戻る途中、洗面所の中からは風呂場の音が聞こえてきた。

風呂場には小学6年生の美少年男子のハルトがいる。